〔研究ノート〕

住吉の浜松 ―里見家蔵『浜松図屏風』の読み方―

住吉社（大阪市住吉区）は、かつては「住吉の神のお前の浜きよみ」と詠まれているように、なぎさに近いところに鎮座していました。その住吉の浜辺には、歌人によって賞でられた美しい松があり、その松は長寿のめでたさをもつ神木として崇められてきました。

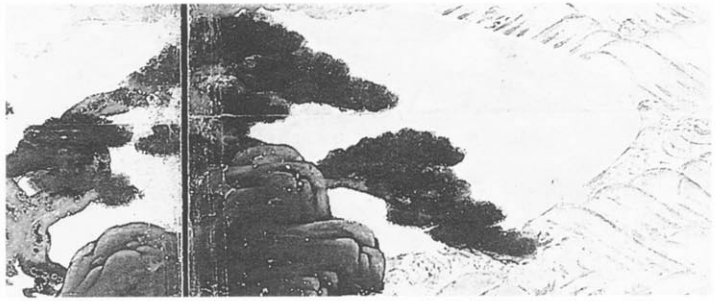
住吉の神はもともと海士や航海者の守神でありますが、いつしか和歌、芸能の神としての尊敬をあつめました。そういうこともあって、院政期には、しばしば上皇方や貴族達が住吉詣を行いました。彼ら都人にとって、その小旅行は多分に遊山気分の晴れやかさをたたえたものでありました。

たとえば、後三条院の住吉詣の有様は、『栄花物語』巻第三十八「松のしづえ」に詳しく書かれています。延久四年（1072）十二月八日、皇太子貞仁親王（白河天皇）に譲位された後三条院は、翌年二月二十日から石清水八幡、住吉神社、天王寺に御幸し、同二十七日に帰京しました。二十五日、帰路の御座船の船上で歌会が催され、後三条院は、「住吉の神はあはれと思ふらむ、むなしき舟をさしてきたれば」と、降居後の心境を詠みました。

その歌会で、王朝の代表的歌人の源経信（1016～97）は、「沖つ風吹きにけらしな住吉の、松の下枝を洗ふ白波」（沖の風が吹き出したらしいな。白波が立ち、あたかも住吉の浜辺の松の下枝を洗っているように見えるよ）と詠み、「当座の秀歌」と讃えられました。「松のしづえ」の巻題はここからきています。このときの後三条院と経信の歌は、のち『後拾遺和歌集』巻第十八や『梁塵秘抄』巻第二などに収録されました。

経信の「沖つ風」の歌は、実際に白波が松の下枝を洗う情景を眼にし、その神さびた光景に感銘して詠んだ歌でありましょう。この叙景歌は後世、古典として多くの歌論書にとりあげられ、たとえば、西行は「とほじろき歌」（気高く奥深い歌、『西公談抄』）、藤原定家は「是ははれの歌、秀歌の本躰と申すべきにや」（『近代秀歌』）と高く評価しています。そういうこともあって、この歌を本歌取りした歌が数多くつくられました。たとえば、「住吉の松の下枝を洗ふ波、こほらぬ声ぞいとど寒けき」（『秋篠月清集』藤原良経）等。

経信が発見した「住吉の松の下枝を洗う白波」は、以降、現実の風景から離れ、歌枕としての「住吉」の浜松のイメージを形成する重要な要素の一つになりました。またそれは、歌以外の分野、たとえば謡曲にもとり入れられ、『草子洗小町』の中で、「住吉の。久しき松を洗ひては岸に寄する白波をさつとかけて洗はん」と謡われ、そのイメージを広めることに大きな役割を果たしました。



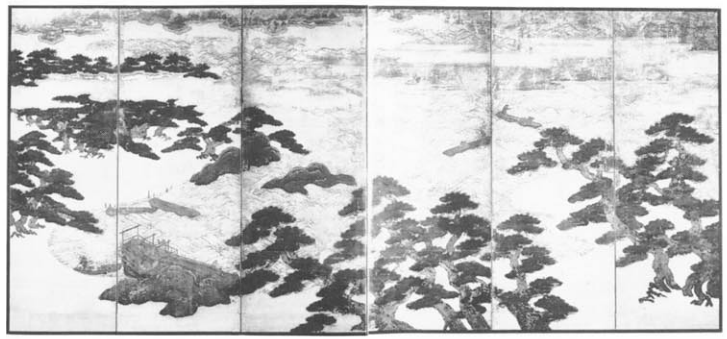
『浜松図屏風』（左隻・左第3扇）　松の下枝を洗う白浪

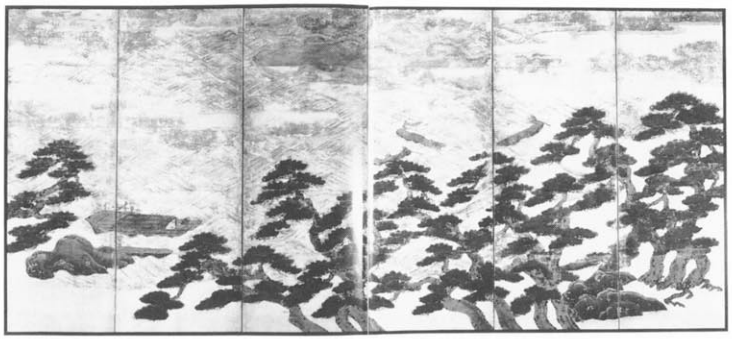
また、それを本歌取りした一つに、鎌倉時代の歌人、後徳大寺左大臣実定の「（晩霞という事をよめる）なごの海の霞のまより詠むれば、いる日をあらふ沖つ白波」（『新古今集』春上）という春の景気を詠んだ歌があります。「なごの海」は住吉の海のこと。霞の切れ目から、沖の白波が（茜色の）夕日を洗っているように見えるよ。「霞のまより」は、やまと絵などの手法からきた表現です。この歌は、絵画的視点に立って表現されているのです。

絵画的視点に立つといえば、宇治川合戦で有名な源頼政の「住吉の松の木間より詠むれば、月落ちかかる淡路島山」の歌もそうでありましょう。この「住吉の松の木間より詠むれば」は、謡曲『梅枝』で「心も共に、住吉の、松のひまより詠むれば、波もてゆへる淡路島」と謡われ、これは住吉の海景を見る視点の一つになりました。

ところで、祭主輔親の歌に、「（障子絵に住吉社にまうづる人あり、あみひくところ）すみよしの神の久しきためしにて、ひくあみの目のかずしらぬまに」（『夫木和歌抄』巻第三十三）とあります。住吉の浦は潮の干満によって潟になりやすいところで、別に「浅香潟」（『万葉集』や謡曲『高砂』『呉服』にでる）とよばれました。そこでは、満潮のときに洲に下して魚や海老を採る「洲流網」や「地引き網」などの漁が行われました。住吉明神の加護によって、海士たちは無事に漁を行うことができたのです。

さて、里見家蔵『浜松図屏風』（六曲一双、紙本著色）は、伝土佐光重筆の伝承をもつの室町時代の十五世紀ごろの作で、現存最古の浜松図です。陸地の視点から、松林と洲浜とその背後に大きく広がる白





波の海原を望み、霞と雲の切れ目から海波を見下ろすという大胆な構成は近世的な感覚の表現です。一双を一大画面とし、ダイナミックで臨場感にあふれています。

左隻には、松の下枝を洗う白波が二個所あり、岸の岩陰に停泊し人の帰りを待つ幟旗のある御座船、何処か遠くを指差し語る水夫たち、漁を終えて帰路につく二艘の釣り舟などあり、右隻には、岸に停泊する輸送船、満潮に網を下ろす三艘の舟などが松原越しに見えます。

この『浜松図屏風』は、「これを住吉と判断する確証は得がたい」（武田恒夫氏『日本絵画と歳時』）といわれています。確かに、この画には「住吉」を示す特徴あるモチーフの社殿や鳥居や太鼓橋や玉垣などは描かれていませんので、この場所を「住吉の浜」と断定することは出来ないでしょう。しかし、やまと絵の風景画が常に和歌と深いつながりをもって描かれてきたことも歴史的事実であります。この画の長閑な、やすらかな感じは、この世界が神によって見守られていることからくるのではないだろうか。この屏風絵を鑑賞するとき、伝統として詠われてきた歌枕としての「住吉」のイメージを重ねて見ることは許されてよいのではないでしょうか。（林進）

季刊 美のたより No.96
平成3年8月15日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.